

【添付資料①】

過去最多となる 8,608 点(アパレル部門 6,782 点、ファッショングッズ部門 1,826 点)の応募が寄せられた第 24 回(2024 年)「YKK ファスニングアワード」において、アパレル部門 ^{いわの れんゆう} 岩野 蓮 祐 さん(大阪文化服装学院)、ファッショングッズ部門 ^{ラ ショウ カ} LO HSIANG HUA さん(文化服装学院)がグランプリに輝きました。受賞作品、入選作品によるファッションショーと授賞式の収録動画は、以下 URL より視聴いただけます。

<https://youtu.be/14Db20J-ybI?si=CEXhnPDZg6GCU0gB>

【アパレル部門】 ^{いわの れんゆう} 岩野 蓮 祐 さん(大阪文化服装学院)

■受賞作品に対する想い

「男」「女」「若者」「大人」と属性で括られることに違和感があり、自分の足で立っている人への「人間賛歌」として、ファスニング商品にこれまでなかった機能性を持たせることで「個としての美しさ」を表現しました。通常、「オス」「メス」と呼ばれる面ファスナーのパーツが並列の関係になるように、切り込みを入れてパズルのように重ねました。一人ひとりそれぞれに名前があって、人生があって、思いやストーリーがあり、毎日踏ん張って立っているの、「男」「女」という一括りではなく、それをフラットにして、一歩先に進んでいきたいといった意味を作品に込めました。ファスナーについても同様の考え方で、「開閉」に限定するのではなく、ファスナー自体をどうかつよく見せられるかに主眼を置き、機能的な美しさにフォーカスしてギャザーを表現しました。全体のデザイン面では、とにかく着ておしゃれな服にしたいという気持ちがありました。男性のスカートを衣装として確立しているスコットランドのキルトに魅力を感じ、インスピレーションにしました。パーツの切り込みがとにかく大変で、そこは“友達パワー”で何とか乗り切りました。今回グランプリをいただけたことで、自分の物の考え方やデザインをこのまま続けてもいいのだと自信になったのと同時に、パターンや縫製の細かい部分まで目を配る YKK の凄みも感じます。もっと学んで経験を積んで、いつか自分のブランドを立ち上げるのが目標です。



■審査員講評

作品の軸となったのは YKK 商品の多様性です。まず、ファスナーの多様性。ファスナーにストリング機能を与えることでギャザーを表現し、キルトスカートとハーネスに仕立てました。これは、70 年代のパンクスタイルをイメージさせます。次に、面ファスナーの多様性。四角く切り取った「POWERHOOK®」を用い、ビッグシルエットのブルゾンとショートパンツを作りました。これは 90 年代のストリートスタイルをイメージさせます。その 70 年代と 90 年代の背景を織り交ぜながら、YKK 商品をうまく活用し、ハイファッションを作り上げたのが最大の注目点。変身や擬態化をテーマにした作品が多い中で、ファスニングアワードにファッション性のある新しいリアルを持ち込みました。まさにグランプリにふさわしいアプローチです。(藤田 恭一氏/デザイナー)

【添付資料②】

【ファッショングッズ部門】 ^{ラ シ ョ ン カ} LO HSIANG HUAさん（文化服装学院）

■受賞作品に対する想い

グランプリを受賞できたことに対し、協力してくださった先生や審査員の皆様、そして両親に感謝をささげたいと思います。周囲の声を気にせず、やりたいことに没頭して製作できたので自信はありましたが、まさかグランプリを獲得できるとまでは思っていなかったもので、大きな評価を頂けたことに自身の成長を感じました。私の宝物の「クマのぬいぐるみ」、親の持ち物である「水晶」、そして「アイスクリーム」の3種類の「大切な物」を大事に保管し、持ち運ぶにはどのような形にするべきか、というアプローチで制作を進めました。中心のボール部分の縫製や、素材選びには苦勞しましたが「大切なものを守る」というテーマを実現した作品になったと思います。透明部分にアクリルを使用しているため、パーツ部分にアクリルに似た質感の本革を使っている点もこだわりです。中身が浮いている様に見えるのに、YKKの回転バックルが役に立ちました。ファスニング部分には「AquaGuard® NATULON® コイルファスナー」を使い、アクリル素材との親和性を高めました。今回の受賞で物作りへのモチベーションの更なる高まりを感じたので、今後も、遊び心のある大人の方に向けたバッグを作れたらと思います。



■審査員講評

圧倒的な完成度を誇り、グランプリにふさわしい作品だと思います。その完成度は製品としてのクオリティだけでなく、コンセプトやメッセージ性を含む作品全体の質の高さに現れています。制作者である作者にしか表現できないストーリー性を感じる点も高く評価できます。一見バックやトランクのように見えるものの、単なる荷物を運ぶ道具ではなく、持ち主の記憶や大切な思い出を守り、保管し、さらに持ち運べるツールとしての役割がある作品です。内部は基本の球体のケースだけでなく、可変性がある点もその人にとっての大切な物を入れるのにふさわしいと思います。作品を提出する際には、「クマのぬいぐるみ」「水晶」「アイスクリーム」を入れることを想定していましたが、特に作者が大切にしている「クマのぬいぐるみ」に関しては、レプリカを自身で作成して提出してくれました。我々は本物を見たわけではないのですが、それほど大切なものを象徴として提示することで、作品への思いがひしひしと伝わってきました。用途とテーマがうまくかみ合い、作者の世界観を強く感じられる作品だったと思います。

（館鼻 則孝氏/アーティスト）

（取材協力 織研新聞社）

以上